



新・社会心理学

李 光鎬
杉浦淳吉 編著
平石 界
今井芳昭
吉川肇子
増田真也
李 津娥

序

社会心理学はどのような学問なのか。最も端的に、そして的確に、その特徴を記述しているものとしてオールポート (Allport, 1968) の定義を挙げることができる。彼は「個人の思考、感情、行為が、实在の他者、または想像された他者、[生身の他者]、またはある役割を演じている他者の存在に、どのように影響されるかを説明し、理解しようとする試み」(p.3) として社会心理学を定義したのである(注)。この定義に従えば、社会心理学は、個人の思考、感情、行為を対象としているという点で、まず「心理学」における一つの領域として理解することができる。そして、心理学がより一般的な心のメカニズムを探求しているのに対して、社会心理学は、「他者の存在」と関わる心理に限定して関心を示しているという点で、違いがあるといえる。社会心理学の「社会」とは、要するに、実際にまたは頭の中で「他者と向き合っている」「他者に囲まれている」環境のことであり、そのような環境の中で個人は、どのようなことを思い、感じ、行うのかを明らかにしようとする学問的営みが、まさに社会心理学なのである。

心理学と社会心理学の標準的な教科書の目次を眺めてみると、両者のこのような違いがよくみえてくる。試しに有斐閣が出している教科書で比べてみよう。心理学の教科書(無藤ほか『心理学』2004)では、心と脳、感覚と知覚、記憶、学習、言語、思考、情動、動機づけ、性格などと続く。一方で社会心理学の教科書(池田ほか『社会心理学』2010)では、社会的認知、自己、ステレオタイプと原因帰属、態度、対人関係、集団、組織などが取り上げられている。同じ「知覚」の問題であっても、心理学では、色や形の知覚も含め、知覚の一般的仕組みを探求するのに対し、社会心理学では、人(他者)をどう知覚するかという問題に関心を寄せる。同じ「記憶」のことであっても、他者の顔、他者が語った言葉、他者との出来事などなど、他者についての記

憶を社会心理学では問題にするのである。

しかし、このような社会心理学を「心理学的社会心理学」と名づけ、「社会的社会心理学」と区別する見解もある。『社会学小辞典』（有斐閣、2005、p.257）では、社会心理学を次のように定義している。「社会学と心理学との境界領域に立つ科学。研究者の学問的背景や関心の方向によって、対象や方法に差が見られるが、大別すれば、『社会的文脈のなかで個人の行動や心理』を研究対象とする心理学的社会心理学と、『社会成員に共有されている行動や心理』を対象とする社会学的な社会心理学に分けられる」と。ただ、最近の社会心理学における研究活動の流れは、前者の心理学的社会心理学の関心に乗っている感が強い。もちろん、社会学的社会心理学の領域もたいへん重要な研究分野であることは言うまでもない。

社会心理学が分析の対象としているのは、人々の心理、つまり心の働き、心の仕組みである。しかしそれは、触ったり、直接目で見て観察したりすることができない。最近では、テクノロジーの進歩により脳の活動をリアルタイムで可視化できる装置なども開発され、心理学の研究において広く活用されているが、社会心理学ではまだあまり採用されていない。一種のブラックボックスとも言える人の心の内面をどうすれば「調べる」ことができるのか？これまで社会心理学が採用してきた調べ方の代表的なものは実験（experiment）である。

実験とは、外部から刺激を与えて、その刺激によって引き起こされる結果を観察することで、刺激と結果の間の因果関係を立証しようとする方法である。誰かと一緒に同じ作業をしたら（刺激）、一人のときよりもパフォーマンスが上がった（結果）とすれば、「同じ作業を行う他者の存在はパフォーマンスを促進する」という因果関係を立証することができる（もちろんこれは単純化した話で、実はいろいろ揃えなければならない条件がたくさんある）。そして、この因果関係から人間の内面において何が起きているのか（例えば競争心の芽生え）を推論することができるのである。

社会心理学が頼りにしてきたもう一つの調べ方は、サーベイ調査（survey research）、すなわち言葉で質問をして（言語刺激を与えて）、それに対してどのように答える（反応する）のかを観察することである。「誰かと一緒に作業

をすると、あなたは一人のときよりも頑張るほうですか？」と質問をして、多くの人々から集めた答えをもとに、「同じ作業をする人の存在と動機づけの関係」を立証し、その関係から心の内面を窺い知ろうとするのである。人間の様々な心理を捉えるために開発されてきた心理尺度が、このサーベイ調査方法では大きな役割を果たしてきた。いろいろな角度から言葉で質問をすることで、個人の性格特性や心の働きを捉えようとする、社会心理学にとってなくてはならない大事な測定道具である。

本書は、このような社会心理学の研究成果を学べる教科書を意図して書かれたものではあるが、いわゆるオーソドックスな教科書とは異なる。もちろん、基本的な社会心理学の概念や理論の学習にも配慮しているが、どちらかといえば、社会心理学の概念や理論で社会的な事柄をどのように把握し、説明し、対処するかという点により力点を置いている。そういう意味では、応用社会心理学 (applied social psychology) の教科書に近いのかもしれない。取り上げていない、または十分に説明されていない基礎概念や理論については、社会心理学の辞典などを参照しながら読み進めてほしい。

本書の構成

次に、本書の構成を概観していく。本書は大きく2部構成をとっている。第I部は社会における個人の意識や行動を扱い、第II部は社会からの影響や社会的課題を扱っているが、必ずしも明確に分けられるわけではない。それは、この二つが相互に関連し合っているからであり、それぞれが密接に関わっていることこそ理解していただきたい。以下、第I部と第II部の内容をみていく。

第I部は「社会を作り、その中で暮らす」をテーマに、配偶と家族、依頼と説得、利他と協力、リスク、キャリア形成、健康といったトピックについて扱っている。第1章から第3章までは第I部の基礎であり、本書全体の基礎でもある。第1章では配偶と家族という集団形成の根源的なトピックを通じて「進化」という考え方の基礎を学ぶ。第2章では他者への働きかけ、他者からの働きかけが私たちの態度や行動に意識的・無意識的にどのような影響を与えるのかを様々な理論を通じて学ぶ。第3章は、個人と社会の関係に

において利他的・協力的行動がなぜ生じうるのか、再び進化の観点を取り入れて考えていく。第4章から第6章までは社会生活を営む上での課題を取り上げる。第4章では生活の中で起こりうる様々な危険性についてリスクという考え方を関連する理論を通じて理解する。第5章では経験を積んでいく過程としてキャリア発達や計画について組織心理学的な観点も含めて理解する。第6章では健康に関する生活習慣の形成やストレスの影響を社会状況やリスク判断の観点からも検討する。

第Ⅱ部は「影響し合い、よりよい社会を目指す」をテーマに、社会的勢力と認知、メディア、社会調査・世論調査・ランキング、普及・流行、環境配慮、防災といったトピックを扱っている。第7章は私たちが社会的にどのような影響を与え合っているのかを概観する。第Ⅱ部の基礎的な部分である。第8章は実際問題としての影響過程を従来のマスメディアだけでなくインターネット（SNS）についても詳しく扱っていく。第9章は人々の考え方や行動を探り政策にも活用される社会調査に着目し、その背景にある理論、活用とその課題について考えていく。第10章は影響が社会全体に広まっていく過程を普及と流行という観点から検討していく。第11章は環境問題とその対処、第12章は災害と防災、それぞれ社会的に重要な課題に対して社会心理学を応用するという観点を学ぶ。

本書は、社会における様々な現象や課題をすべてカバーしているわけではなく、主なトピックを選んで社会心理学的に解説したものであるが、全体を一通り読むことにより、社会現象の理解や課題の解決についてどのようにアプローチしたらよいか学習できるようになっている。また、同じ理論が複数の章で何度も登場することがある。このことから一つの理論が様々な現象の理解に役立つことも理解できる。扱われているトピックを起点として、各自が日常生活を送る中で関心をもつ様々な現象について、同様に社会心理学の知見を用いて理解・考察することができるようになれば、本書は役目を果たしたことになる。

学習の仕方

学習の仕方として、序文および目次を念頭に、全12章をざっと一通り読ん

でみるとよい。最初はあまり細部にはこだわらず、関心のある章から読んでいけばよい。一通り読んでいくと、複数の章の間で同じ理論が出てくるように、各章相互の関連性に気づけるはずである。その上で各章を改めて熟読し、頁をめくりながらトピック同士のつながりを意識し、社会心理学の理論で説明される様々な現象を各自の日常生活での具体例に置き換えて考えられるようにしていただきたい。

文献リストや演習課題も参考にし、興味をもった参考書を見つけてみてほしい。社会心理学の文献だけでなく、関連分野のテキストもあわせ、現実の世界で起きている様々な出来事の原因や課題の解決方法を提案することができるだろうか。日常生活や社会でみられる様々な課題について、社会心理学によって説明できることを目標とし、日ごろから対人関係、集団や社会の問題について目をむけ、そうした問題について社会心理学で考える楽しさをぜひ味わっていただきたい。

注：この定義の原文は、an attempt to understand and explain how the thought, feeling, and behavior of individuals are influenced by the actual, imagined, or implied presence of others である。この中の implied presence の意味についてオールポートは、「集団や社会構造の中における個人の位置や役割によって遂行される様々な行動」(Allport, 1968, p.3) と説明している。

引用文献

- Allport, G. W. (1968) The historical background of modern social psychology. In Lindzey, G. & Aronson, E. (Eds.) *The Handbook of Social Psychology 2nd edition*. Pp. 1-80.
- 濱嶋朗・石川晃弘・竹内郁郎 (編) (2005) 『社会学小辞典 [新版増補版]』有斐閣。
- 池田謙一・唐沢穰・工藤恵理子・村本由紀子 (2010) 『社会心理学』有斐閣。
- 無藤隆・森敏昭・遠藤由美・玉瀬耕治 (2004) 『心理学』有斐閣。

目次

序 iii

李 光鎬・杉浦淳吉

第 I 部 社会を作り、その中で暮らす

第 1 章 配偶と家族 ————— 2 平石 界

- 1 配 偶 2
 - 1-1 なぜ配偶を考えるか 2
 - 1-2 自然淘汰理論 2
 - 1-3 性淘汰理論 4
 - 1-4 ヒトの遅い生活史と子育て 5
 - 1-5 一夫一妻の配偶システム：互いが相手を選び合う 6
 - 1-6 男女の勘違い 7
- 2 家 族 8
 - 2-1 家族の定義・家族の成立要因 8
 - 2-2 家族の葛藤 8
 - 2-3 家族の類似性 10
- まとめ 13

第 2 章 对人的影響 ————— 16 今井芳昭

- 1 对人的影響の分類 16
- 2 無意図的な影響 18
 - 2-1 社会的促進 18
 - 2-2 社会的手抜き 19
- 3 連続的依頼法 21
 - 3-1 フット・イン・ザ・ドア法 21
 - 3-2 ドア・イン・ザ・フェイス法 22
 - 3-3 ロー・ボール法 23
 - 3-4 ルアー（疑似餌）法 23
- 4 説得とそのプロセス 24
- 5 説得理論と行動変容 26

- 1 利他行動の謎 32
 - 1-1 利他行動の定義 32
 - 2 血縁淘汰 33
 - 2-1 子育てへの血縁の影響 33
 - 2-2 血縁度の拡張とハミルトン則 33
 - 2-3 歴史的証拠 35
 - 2-4 血縁認知の問題：祖父母愛を例に 35
 - 3 互惠的利他主義 36
 - 3-1 非血縁者間での援助行動 36
 - 3-2 互惠的利他主義の理論 36
 - 3-3 裏切り検知メカニズム 37
 - 3-4 関係終結の効果 38
 - 3-5 受益者の利益の推定：言われる前にやるか、言われてからやるか 40
 - 4 評判に基づく間接互惠性 41
 - 5 社会的ジレンマ 42
 - 5-1 社会的ジレンマの構造 42
 - 5-2 現実社会の社会的ジレンマ 43
 - 5-3 社会的ジレンマを解決する仕組み 43
- まとめに代えて：見せかけの利他性と純粋な利他行動 44

- 1 生活の中の様々なリスク 48
- 2 リスクを認識する仕組み 49
 - 2-1 二重過程モデル 50
 - 2-2 認知バイアス 51
 - 2-3 死への恐怖への対処 53
- 3 リスク・コミュニケーション 54
 - 3-1 共有と伝達のコミュニケーション 55
 - 3-2 情報の送り手の信頼性と信憑性 56
 - 3-3 恐怖喚起コミュニケーション 57
 - 3-4 行動変容への抵抗 58
- 4 様々なリスクへの対処と社会的意思決定 60
 - 4-1 顕在的リスクと潜在的リスク 60
 - 4-2 合意形成 60
 - 4-3 専門家と市民とのコミュニケーション 61

第5章 キャリア形成 ————— 66

吉川肇子

- 1 キャリアの定義 67
- 2 キャリアの発達 68
 - 2-1 キャリア発達に対する見方 68
 - 2-2 スーパーのキャリア発達段階説 68
 - 2-3 シャインのキャリア・アンカー 70
- 3 キャリア・プランニング 71
 - 3-1 計画された偶然性 71
 - 3-2 計画は倒れる 73
- 4 周囲の人からの影響 75
 - 4-1 ジョハリの窓 75
 - 4-2 ソーシャル・サポート 76

第6章 健康 ————— 80

増田真也

- 1 生活習慣と健康 80
 - 1-1 現代日本人の生活習慣 81
 - 1-2 より良い生活習慣を身につけ、維持するために 82
- 2 現代社会とストレス 83
 - 2-1 ストレスの身体的・心理的影響 83
 - 2-2 ホームズとレイの生活事件研究 84
 - 2-3 ラザルスの認知的ストレス理論 85
 - 2-4 ストレスの認知・行動面への影響 86
 - 2-5 ストレスと個人差 86
- 3 健康やストレスへの個人的責任という問題 88
- 4 医療健康情報と判断 89
 - 4-1 確率的情報と判断 90
 - 4-2 リスク情報の示し方 92

第Ⅱ部 影響し合い、よりよい社会を目指す——メディア等の影響

第7章 社会的影響力と対人関係 ————— 98 今井芳昭

- 1 社会的影響力とその基盤 98
 - 1-1 社会的影響力の6分類 99
 - 1-2 影響力をもたらす要因 102
- 2 社会的影響力、対人関係とリーダーシップ 104
 - 2-1 社会的影響力と親子関係、友人関係 104
 - 2-2 社会的影響力とリーダーシップ 106
- 3 影響力保持者の認知パターン変化 110
 - 3-1 影響力の変性効果 110
 - 3-2 ステレオタイプ 111
 - 3-3 影響力の接近／抑制理論 111
 - 3-4 影響力の状況焦点理論 113
 - 3-5 影響力の社会的距離理論 113

第8章 メディア ————— 118 李 光鎬

- 1 ソーシャルメディアを利用する心理 118
 - 1-1 ツイッターの利用動機 119
 - 1-2 フェイスブックの利用動機 120
 - 1-3 インスタグラムの利用動機 121
- 2 ソーシャルメディアの影響 121
 - 2-1 社会的比較 (social comparison) 121
 - 2-2 フェイスブック羨望とうつ傾向 122
 - 2-3 インスタグラムが作る身体への不満 123
- 3 マスメディアを利用する心理 125
 - 3-1 新聞の利用動機 125
 - 3-2 ラジオの利用動機 125
 - 3-3 テレビの利用動機 126
- 4 マスメディアの影響 127
 - 4-1 選択的接触 127
 - 4-2 議題設定効果 128
 - 4-3 沈黙の螺旋 129
 - 4-4 イグゼンプラー効果 130
 - 4-5 暴力と性表現の影響 131

第9章 社会調査・世論調査・ランキング ————— 136

増田真也

- 1 世論調査、社会調査とは 136
- 2 社会調査と誤差 138
 - 2-1 無作為標本抽出と標本誤差 138
 - 2-2 非標本誤差とは 139
 - 2-3 測定の難しさ 140
 - 2-4 統計分析を疑う 145
- 3 人々はランキングがお好き？ 146
 - 3-1 ランキングは基準次第 147
 - 3-2 他人の意見は参考になる？ 148

第10章 普及と流行 ————— 152

李 光鎬・李 津娥

- 1 イノベーションの普及過程 152
 - 1-1 イノベーション 153
 - 1-2 コミュニケーション・チャンネル 153
 - 1-3 採用の単位 154
 - 1-4 時間 155
 - 1-5 社会システム 158
- 2 ニュースの普及過程 158
 - 2-1 ニュースの対人的普及 158
 - 2-2 ニュース普及過程に影響する要因 159
 - 2-3 メディア環境の変化とニュース普及過程 160
- 3 流行の特徴と社会心理 160
 - 3-1 流行とは 161
 - 3-2 流行の特徴 161
 - 3-3 ル・ボンの感染説とタルドの模倣説 162
 - 3-4 ジンメルの両価説 162
 - 3-5 流行採用動機の尺度化 163
- 4 流行とメディア、コミュニケーション 164
 - 4-1 流行としての世論 164
 - 4-2 流行と対人的影響 165
 - 4-3 インターネットと流行の変容 166

第 11 章 環境配慮 170

杉浦淳吉

- 1 環境問題からみる社会 170
 - 1-1 社会的ジレンマとしての環境問題 171
 - 1-2 社会的ジレンマの解決 171
- 2 環境配慮行動のモデル 174
 - 2-1 危機対処としての環境行動 174
 - 2-2 個人的規範の喚起 174
 - 2-3 学習理論によるアプローチ 175
 - 2-4 態度と行動の連関 176
- 3 環境行動の促進 178
 - 3-1 記述的規範と命令的規範 178
 - 3-2 情報呈示と説得 179
 - 3-3 行動実行とコミットメント 179
- 4 環境問題の解決に向けて 180
 - 4-1 アクションリサーチ 180
 - 4-2 社会心理学の知見を応用する 181

第 12 章 防災 186

吉川肇子

- 1 災害時の人間行動 186
 - 1-1 危険でないと思ってしまうこと 186
 - 1-2 「パニック神話」 188
 - 1-3 災害時の人間行動 190
- 2 災害時のコミュニケーション 192
 - 2-1 避難をどう促すのか 192
 - 2-2 災害時流言 194
- 3 「安全な社会」のパラドックス 195

人名索引 201

事項索引 201

執筆者紹介 206